

いぐさの作季移動に伴う品質向上に関する研究

(第2報) 各作季における節位形質の相違について

鳥村武範・北島 昂・木下猛夫・村田 稔

(熊本県農業試験場)

第1報において各作季の収量および形質につき報告したが、本報では収量および形質解析の一助とするため、各作季におけるいぐさの節位形質の相違を調査したのでその概要を報告する。

1. 調査方法

調査は第1報の標準7系列について、刈取時に斉一な株5株を根付きのまま掘取り水洗後、その株を代表し得る連続1次茎を1株から2個ずつ合計10個を選び、節位別に茎長、先枯れ長、着花茎および先刈茎を調査した。

2. 調査結果および考察

最長茎節位は植付期の早晩にかかわらず、各作季とも先端から5節目(まれに4または6節目)に現われている。この作季の最長茎の出芽日は、いぐさの1次茎の出芽速度は春季～夏季においては、1節増加所要日数は約11日とされているが(村上, 島村), 本調査の先刈茎節位の逆算ともよく合致し、本調査結果を推定すれば、早刈で5月1日頃、中間刈で5月16日頃、普通刈で6月1日頃となり、各作季とも刈取前44～45と考えられる。

次に、60cm以上の有効茎節位はいずれも3節目から始まっている。有効茎の幅は早刈ほど狭く、極早刈の5節に対して普通刈では8節となっている。この相違を最長茎節位中心にみた場合、最長茎以降に出芽する節位茎の生長量の差は作季間ではあまりみられないが、最長茎以

前に出芽する節位茎にその差が明確にみられ、これが普通刈に比較して早刈栽培が減収すること、また、長い茎中に古茎の混入の少ない一因と考えられる。同様に、105cm以上の長い茎節位幅は、有効茎節位より前後各1節ずつ狭くなっていて、極早刈で3節、普通刈で6節となっており、現実には先枯れ長を考慮するとなお減少する可能性がある。作季間では有効節位と同様の傾向を示した。

早植の効果は早刈栽培になるほど茎長に強く現われ、最長茎長で7cm以上の差がみられ、これが早刈栽培での早植効果となって現われているが、中間刈栽培以降では差は少なかった。

節位別先枯れ長は作季では早刈栽培ほど、植付期では早植ほど長くなる傾向を示した。節位別にみた場合先枯れの徴候は3節目あたりから観察され、節位が古くなるほど先枯れ長は長くなる。先枯れが茎の先端から1cm内外みられる頃が、自然状態では最も良質な茎となり、節位別では先端から5節目の最長茎がこれに該当する。

先刈茎の混入節位は各作季ともおおむね、長い茎節位の始めに現われていて、早刈栽培ほど最長茎節位に接近している。このことが早刈栽培では普通刈栽培に比較して、長い茎の中に先刈茎や着花茎の混入割合を多くし、先枯れ長とも相まって品質を劣悪化しているものと考えられる。

第1表 作季別の節位別茎長及び先枯れ長(cm)

作季	植付日	刈取日	先端からの地下茎節位										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
極早刈	10/25	6/2	2	32	95	140	142	109※	64	47			
			0.1	0.7	2.8	5.1	1.6	0.3	16.0				
11/25	6/2	2	26	79	121	135	111	72※	46	36			
			0.1	1.2	3.2	4.1	1.5	12.1	36				
早刈	10/25	6/16	1	28	80	120	140	136※	98	57	43		
			0.2	0.3	2.3	6.3	1.6	0.2					
11/25	6/16	2	33	74	110	128	125	112※	87	62	48		
			0.1	0.7	1.4	2.6	4.3	2.9	0.2	5.1			
中間刈	11/25	6/30	1	42	85	115	132	131	120	107※	87	60	45
			0.2	0.3	0.2	0.8	1.8	3.0	4.6	5.6	19.5	27.2	
12/9	6/30	1	46	85	115	130	129	122	106※	83	59	41	
			0.2	0.3	0.4	1.4	3.9	6.0	6.7	11.9	25.7		
普通刈	12/9	7/15	2	29	99	114	137	132	125	118	109※	82	55
			0.3	3.6	1.5	1.7	1.7	3.3	3.8	7.4	4.5	10.9	

上段茎長, 下段先枯れ長。※印は先刈茎の混入始り節位。——実線は有効茎, ~~~~~波線は長い茎節位中。